港湾の中の緑地～PORT・OASIS～

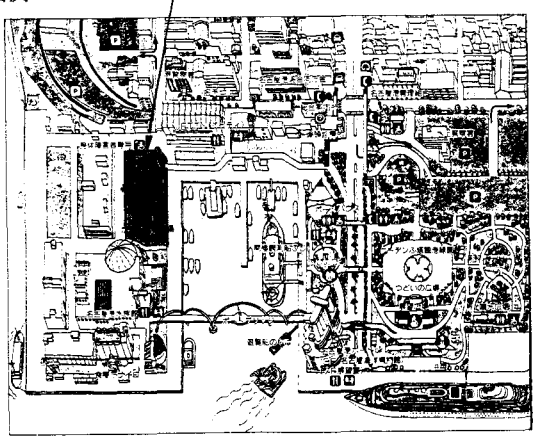
運輸省第五港湾建設局　正会員　　徳田　峯夫
正会員　　高橋　宏直
○伊藤　正人

１．はじめに

「港を見せる・体験する場」として港湾緑地が港湾整備の中で重要な役割を果たしている。
しかしながら、運輸省第五港湾建設局にて全国の既存の港湾緑地を調査した結果、緑地のタイプ（シンボル緑地、レクリエーション緑地等）や規模に関係なく、利用者アンケートからは港湾緑地の特色である水や海をイメージする景観や施設不足が指摘されていることが明かとなった。
こうした問題点をふまえ、既存の港湾緑地を「積極的に人の導入を促進する港湾緑地」と、「港湾の環境の改良・保全を図る港湾緑地」の２種類に大きく分類し、前者を「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」と呼び、この「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」の計画手法の確立を名古屋港２号地地区を事例として試みた。

２．名古屋港における「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」の計画例

今回計画対象とした２号地地区は名古屋港西ふ頭に位置し、平成４年１０月にオープンした名古屋港水族館は、この南側に位置する。
この西ふ頭の東側には、名古屋港の表玄関とも言えるガーデンふ頭があり、ここには約７万m^2におよぶ臨港緑園が整備されている。
この２号地地区において「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」を計画・整備するうえで前記した臨港緑園の空間設計について、斉藤（※）の考え方にもとづいて、平面構成・断面構成・水際線距離の３つの点から望まれる空間条件について、分析を試みた。



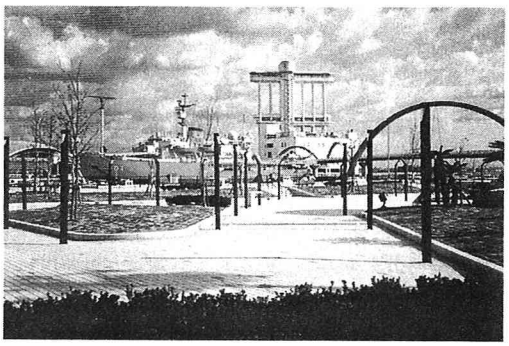
空間条件	望まれる条件	臨港緑園の空間設計
平面構成	・水面囲堯型(凹型の陸域に水域が張りだした形をもつ水面)で短辺400m～500mの長方形に納まる程度が良いとされている。	・ガーデンふ頭は旧中央・東ふ頭を埋立て再開発されたふ頭であり、この埋立により囲堯空間は設定されていない。
断面構成	・水際線に沿った遊歩道、遊歩道から市街地・水域が眺められること、必要な植栽計画、照明計画による演出が必要。	・水際線は基本的に立ち入り禁止であるがこの欠点を埋める水域に対する眺望への工夫が不足し、植栽・照明での演出も不十分
水際線距離	・人の動作を判別できる視距の限界である150m程度までに設定することが適当。	・地下鉄名古屋港駅を降りてから海を眺望出来るには約200～300mを要し、適性水際線距離を遙かに超えた距離を設定。

ここで得られた分析結果をふまえ、新たに整備する２号地地区においては「港を見せる・体験する場」として、また『人が賑わう』 ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳとするためには、次の４つの視点が必要と考えた。
この地区の特徴を生かして計画・整備した内容を具体的に示す。

計画案策定の視点	具体的な演出・工夫策
・緑地内から周辺への「まなざし」の演出	ポートビル、水族館・オーシャンシアターへのビスタを鮮明にし照明によりその方向性を強調した。（写真―１ ①．②）
・海辺の演出、海を眺めるための演出	船だまり側の水際線は、テラスとして階段をつけ高低差により水際線をより近く見せる工夫をした。（写真―２）
・賑わいと夜景の演出	ロマンチックな夜の空間を演出し、恋人・若者が訪れるよう照明施設をもつ列柱を設けた。
・みどりと花の演出	芝生広場にも高低差をつけ意味をもたせるとともにサクラなど季節感あふれる植栽配置を行い、「緑」自体楽しめる演出をした。

（写真―１①）

（写真―１②）



（写真―２）

３．まとめ

今回計画した「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」は、水族館のオープンと併せて既に公開がされ、その利用状態から、今回策定した４つの視点の意義は確認されていると考える。
さらに２号地地区は、水族館の２期工事・南側の港湾緑地の整備が計画されており、よりよい「ＰＯＲＴ・ＯＡＳＩＳ」の形成のために検討が必要である。

【参考文献】 斉藤潮：土木工学ハンドブック第１９編、「土木景観」４．５「港湾・海岸の景観」